

第 3 回

市立幼稚園の在り方検討会議

議 事 録

日 時：2019年7月22日（月）午後3時開会
場 所：札幌市教育委員会 教育委員会会議室

1. 開 会

○事務局（野切幼児教育センター担当課長） 本日は、お忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます。

まず、配付資料の確認をさせていただきます。

お手元に、議事次第と資料1の委員名簿、資料2の市立幼稚園の在り方検討についてというA3判横の資料を御用意しております。資料に不足等はありませんでしょうか。

それでは、検討会議に先立ち、事務局から、1点、事務連絡をさせていただきます。

委員の皆様には、第2回会議の議事録の案を先日送付させていただきました。この第2回の議事録ですが、8月下旬を目途にホームページで公開することを予定しておりますので、御承知おきいただければと思います。

それでは、第3回の検討会議に移りたいと思います。阿部議長、よろしくお願いいたします。

○阿部議長 これから第3回の市立幼稚園の在り方会議を開催します。

まず、本日の出欠ですが、三井委員からは欠席の旨の連絡があります。また、齋藤委員からは遅参という御連絡がありましたので、お知らせします。

2. 議 事

○阿部議長 それでは、議事に入りたいと思います。

前回の会議では、市立幼稚園の在り方の検討に当たって四つの視点のうち、1「時代に即した幼児教育の展開」と2「札幌市の幼児教育の質の向上」について論議いただきました。今回は視点3の「特別支援教育の充実」と、視点4「幼保小連携の推進及び家庭教育支援の充実」について皆さんから御意見をいただきたいと思います。

まず、議題の1点目である視点3「特別支援教育の充実」について、事務局から説明をお願いします。

○事務局（野切幼児教育センター担当課長） それでは、資料の説明をさせていただきます。資料2の1枚目をごらんください。

まず、視点の背景ですが、近年、特別な教育的支援を必要とする子どもが増加傾向にあります。

右側の表1にあるとおり、これは小学校と中学校となりますが、特別支援学級に通う子どもは、2008年の1,436人に対して2018年には2,843人と、ほぼ倍増しております。

あわせて、障がいの重度・重複化、多様化といったこともありますので、一人一人の状況に合わせた支援が求められております。

また、支援の必要な幼児に対し、教師や他の幼児と集団で生活することを通して全体的な発達を促していくことや、家庭や地域での生活を含め、長期にわたり一貫性を持って支援していくことが求められております。

さらに、障がいのある子どもとない子どもがともに教育を受ける、いわゆるインクルーシブ教育の理念を踏まえた教育・保育の実践がより一層求められております。

このような背景を踏まえ、視点3の具体的な取組、3-①「一人一人の状況に

応じた適切な幼児教育の提供について」の事業展開として、グレーの網かけ部分が3点ありますので、その3点について説明させていただきます。

まず、1点目の「個々の幼児の教育的ニーズに応じた指導内容や指導方法の充実」についてです。

これまでの取組として、幼児への支援を園全体で推進する役割を担う特別支援教育コーディネーターという役割の先生を各幼稚園で配置しており、学級担任や支援担当者と連携を図り、幼児の状態に応じた支援内容を検討して、指導に当たってきました。

また、個別の教育支援計画を保護者の方と共有し、家庭と連携した支援を行っております。

この個別の教育支援計画ですが、この計画の様式をサポートファイルさっぽろとして、子どもの実態や育ちの状況を保護者と関係機関で共有するため、活用を進めてきております。

また、市立幼稚園で、幼児教育支援員が保護者の方と教育相談を行った際には、相談の内容を、保護者の了承の上、その子どもが通う私立幼稚園等に伝え、指導内容や方法を共有し、各園でもその子どもに合った実践を行えるような取組を進めてきております。

課題と今後の方向性としては、障がいの重度・重複化や多様化に対応する支援、また、早期からの一貫性、継続性のある支援の充実が挙げられると考えています。

例えば、幼児期からサポートファイルさっぽろを活用した支援を全市的に推進できるように、市立幼稚園から活用事例を発信するなどの取組をしていきたいと考えております。

次に、2点目の「障がいのある幼児とない幼児が共に遊び、学ぶ機会の効果的な設定」についてです。

これまでの取組として、市立幼稚園では、早期から全ての幼児が同じ環境のもとでともに遊び、学ぶ教育・保育を行っております。

具体的には、幼児一人一人の良さを伸ばす個別の教育支援計画を作成し、指導に生かすなどして、子どもたちが互いに認め合う環境を作ってきました。

また、これらについての実践研究を行い、その成果を発信してきました。

課題としては、インクルーシブ教育に関する教職員の意識の向上や適切な教育課程の編成が挙げられると考えております。

今後の方向性としては、集団の中で子ども一人一人の状況を把握し、適切な指導や支援を行うなど、インクルーシブ教育の実践研究をより充実させ、幼児教育施設の教育・保育により生かしていただけるような研究成果を発信していきたいと考えております。

最後に、3点目の「特別支援教育に関わる研究成果の発信や研修機会の提供」についてです。

これまでの取組としては、地域公開保育などを通して、特別支援教育の在り方について幼児教育施設等に発信してまいりました。

また、支援を必要とする幼児を担当する私立幼稚園等の先生たちに対して、個別の教育支援計画の作成や活用方法などについての研修を実施しております。

右側の表2にありますように、この研修の参加者は、昨年度は若干減少してお

りますが、総じて増加傾向にあります。

課題と今後の方向性としては、特別支援教育の新たな動向や幼児教育施設のニーズなどに応じた研修や研究が必要と考えておりますので、多様な幼児教育施設の実態、教職員の経験に応じた研修機会の拡充や、実践研究の発信などを通して、札幌市全体の特別支援教育に関する教職員の資質や専門性を高めること寄与していきたいと考えております。

説明は以上です。

○阿部議長 視点の3について、事務局から説明がありました。

まず、加藤委員から、市立幼稚園で特別な教育支援が必要な子どもに対して行っている事業などの補足、また、実際に取り組んでいるようなことがありましたら、御意見ををお願いします。

○加藤委員 今の事務局からの説明のとおりですが、市立幼稚園は、早くから、園全体で特別支援教育の体制をつくり、障がいなどのある子とそうでない子がともに育ち合う保育を目指して取り組んでまいりました。

また、各園に配置している特別支援教育コーディネーターが、各関係機関との連絡調整の役割を果たしています。

当園でも、今、年長児の就学に向けて、各学校や関係機関、保護者との連携の窓口となり、コーディネーターが動いているところです。

支援の必要な子どもたち一人一人の教育支援計画、個別の指導計画等については、園内で定期的に学びの支援委員会やケース検討会議などを設けて、より良いものになるように検討しています。

また、保護者の希望も聞きながら、指導の内容や狙いなどを説明し、一緒に支援を進めています。

教育支援計画などは、サポートファイルに入れていただき、卒園後も支援が適切に続いていくように活用の仕方をお伝えしたりしています。

支援自体は、幼児一人一人の実態をまずよく把握し、その子の状態に合わせた教師の関わり方や環境の用意などをしております。

そのために、担任や支援担当者だけではなく、園全ての職員が協力し合う園内の体制を工夫して保育に当たっています。

研究実践園は、自身の属する市立幼稚園だけではなく、区内の幼児教育施設全体のことを考えていかななくてはなりません。

一人の子どもを家庭から園へつないで、そして、園では、幼児教育支援員が幼稚園訪問支援や地域教育相談等で地域の園生活を支える、そして、小学校へ支援をつなぐという、これまでの札幌市の支援の必要な幼児をどのように支えてつないでいくかという幼児の特別支援教育の考え方を理解し、そのように進んでいくように市立幼稚園は取り組んできました。

市立幼稚園で実践した支援が必要なお子さんに効果的な環境の構成の仕方や教材などを私立幼稚園等の先生方に紹介するほか、私立幼稚園等の先生方が知りたいこと、困っていることなどに対応する研修会を各区で開きました。

本園でも、講師をお招きして、区内の幼稚園や保育所、認定こども園の先生方と一緒に学ぶ特別支援教育に関する研修会を毎年開催しています。

特別支援教育については、とてもニーズが高いと認識しておりますので、これからも市立幼稚園が力を尽くしていきたいと思っております。

○阿部議長 ありがとうございます。

それでは、齋藤委員から御意見をいただきたいと思います。

齋藤委員は、札幌市のことばを育てる親の会の会長として、教育的な支援が必要な子どもたちに対するニーズや要望を日ごろから聞くことが多いかと思います。

幼児期から教育的な支援を行う上で、市立幼稚園をはじめとした幼児教育施設に期待することなどがあれば、御意見をいただければと思います。

○齋藤委員 私の子どもが幼稚園に通っていたときには、今のような相談体制はなく、「さっぼ」というところをきっかけに色々なところにつながりながら、幼稚園に通い、その後は、ことばの教室の幼児相談があったので、そこで幼児相談を受けながら、小学校へ入学した経験をしています。

個人的な経験ですが、当時は病院に通っていて、心理療法士からの作業療法的なものやセラピーも受けましたが、病院やセラピーでは、子どもの状態のことは教えてくれたり、こうしたらいいよというアドバイスはたくさんありましたが、私が一番支えになったのは、親としてどうしたらいいか、母親としての不安な気持ちや揺れ動く気持ちを受け入れてもらえるような場所は、ことばの教室の先生であって、その存在がとてもありがたかったです。

少し前までは、卑屈というか、マイナスに考えていたけれども、前向きになったという状態も知ってくれて、先生からの声かけも、「頑張っているね。」という言葉も、母親としてすんなり受けとめることができました。

もし、私の子どもが幼稚園生で、少し困り感もあって配慮してほしいと思う状態でポロップ広場に行っていたとしたら、やはり、園生活を見ている、そして、保護者の気持ちも知っているという点で、子どもと保護者を一体的に受け止めてくれるような相談体制があれば、療育にも前向きになれると思いますし、先生も、一生懸命になり過ぎると子どもに対して、無理を言ってしまう場面もあると思うので、保護者と子どもが、誤解なく進めていけるのではないかと思います。

○阿部議長 ありがとうございます。

それでは、私立幼稚園の立場から丸谷委員に御意見をいただきたいと思います。よろしくをお願いします。

○丸谷委員 最初の「個々の幼児の教育的ニーズに応じた指導内容や指導方法の充実」の点です。

資料の右側の上から四つ目のポツになりますが、教育相談ということで、各区に市立幼稚園の教育相談があり、それを活用し、私立幼稚園に通う子どもたちの支援、保護者の相談を行った上で、私立幼稚園と連携し、実際の園生活の中で先生方の関わり方に生かすということは実際に行われてきていることです。

この運用ができてから10年ほどたつと思います。

私は、1回目の検討会議でも話しましたが、私立幼稚園の先生は、この運用が保護者との安定的な関わり方に役立っていると、とても実感しています。

ここに書いてあるように、相談内容などを事前にお知らせいただいてから入園するというケースも増えてきました。

入園してから相談につなぐ場合もありますが、齋藤委員からも話があったように、以前はあまり充実していなかった教育相談体制が時間とともに充実してきて、今、これほどまでの体制が整ってきたので、今後、これを衰退させるのでは

なく、さらに充実していく議論を続けてほしいと思います。

そのためには、私は何度もお話ししているのですが、市立幼稚園という幼児教育としての機能がしっかりあることや、そこで研さんを積まれたベテランの先生方も含めて力量のある保育者がそこにいるから、教育相談が成り立っていると思いますし、実践なくして教育相談の場はないと考えていますので、この点は市立幼稚園の在り方の大きなポイントとなってくるのではないかと考えております。

続きまして、特別支援教育に関わる研究成果の発信や研修機会の提供の点です。

こちらに関しては、取組のところにも記載されておりますが、私立幼稚園の教員に対して、個別の教育支援計画や指導計画の作成等について適切な援助をいただきながら、どのように一人一人に応じた関わり方を模索すればいいのかという点で大変助かっております。

そして、そこに書いてある研修も充実していただいているのです。

表にもありますが、特別な教育的支援を必要とする幼児の支援担当者研修ということで、特別支援教育に関しての支援担当者に対して行う研修の参加者数だけが表に書かれていますが、参加者数だけに限らず、研修の中身として、研修に参加したことが園の中で生かされているということ、各園の先生方からも耳にする機会が多いです。

そして、区の中でも連携をとりながら、私立幼稚園主催の研修会の講師にも幼児教育支援員に来てもらい、発達検査の方法等を教えてもらっています。

先ほど加藤委員からも、私立幼稚園等にも情報等や成果を伝えていただいているというお話がありました。

市立幼稚園で、実際に支援の必要な子へこのような関わり方をしている、このような教材を使っている、といった情報提供をしてもらい、私立幼稚園が、人員配置や運営費の問題等でできない点に取り組んでいただいていることは、子どもたちや保護者のためになっていますので、このような研修機会、研究成果の発信、共有という点に関しては十分成果を上げられているのではないかと感じております。

○阿部議長 ありがとうございます。

続きまして、保育所との立場から水岡委員にお願いしたいと思います。

保育所でも特別支援教育が必要な幼児への関わり方の課題などあると思います。また、今後に向けた取組など、御意見をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

○水岡委員 保育園は0歳児も入園しますので、先天的な障がいを持つお子さんももちろん入園しており、0歳から発達の状況を見ながら、取り組んでおります。

話が前後しますが、私立保育園連盟でも特別な支援を必要とする障がいのある子に対応した研修はとても大事にしており、職員は、学びに対して、園内研修も含めて取り組んでいます。

今、札幌市としては、巡回指導ということで、子ども未来局から、年2回ですが、元「ちくたく」の先生に園へ来ていただいて、子どもの様子を見ていただいています。

障がい児認定を受けている子どもが主ですが、そのほかに、少し心配のある、園として見ていただきたい子どもも見ていただきながら、保護者の方にこれからどのように伝えて、どのように進めていったらいいか助言いただいております。

特別な支援を必要とする子どもは本当に増えております。

障がいも複雑になってきており、特別な支援を必要なことを保護者になかなか認めてもらえなくて、支援につなげるためにはどうしたらいいかというところを保育園の中では一番悩んでおります。

その中では、今、各区の市立幼稚園には、コーディネーターがいて、保育園とは少し違った立場で、発達検査を受けながら、子どもを見てもらっています。

児童相談所や病院関係に子どもを見てもらうとなると保護者は構えてしまうのですが、「市立幼稚園で見てくれますよ。」と言うと、とても行きやすいという思いが保護者にはあるようです。

市立幼稚園で見てもらい、今後につなげていきたいと思いますという形で提案すると、保育園としても話しやすいのが実情です。

このような相談を、保育園が、公立幼稚園さんの立場をうまく使って、もっと活用できればいいと思います。

しかし、限られた人数の中でなかなか来ていただくことができなかつたり、先日、就学に向けてのお子さんをお子さんをかっこう幼稚園に紹介したときに、「見ることができるのは、9月末です。」というように、すぐに対応することはなかなか難しいのかと思います。

特別な支援が必要な子どもの数が増えている中で、各区に幼児教育支援員が一人というのは少ないと思います。

そういう面では、もう少し幼児教育支援員の人数が増えていただけると、保育園として、よりありがたいと思っております。

○阿部議長 ありがとうございます。

今、保育所の立場からお話いただきました。

続きまして、福祉コンサルタントとして普段から相談を受けている相内委員からも御意見をいただきたいと思います。

特別な支援を要する幼児に対する支援について、民間とは異なる行政としての市立幼稚園が担うべきことや学校が行うべきことなど、御意見をいただけたらと思います。

○相内委員 質問からさせていただきます。

特別支援コーディネーターはどのような研修を受けているのですか。

その資質の維持、向上させるための一定の取組があるのでしょうか。

○事務局 教育委員会で実施している研修があり、特別支援コーディネーターに初めてなる方と経験を重ねた方が受けられる研修を設定しております。

あとは、各市立幼稚園の中で行っているものがあります。

特に市立幼稚園では、研究実践園教員研修Ⅱという特別支援に関わる研修を、1年間を通して行っており、毎年継続して行っています。

その内容も、個別の教育支援計画を作成するようなものや、私立幼稚園の訪問支援を体験していく研修など、先生のニーズに合った内容を選んで行っているところです。

○相内委員 特別支援コーディネーターは、幼稚園の方は少数の方しか存じ上げ

ていませんが、学校のほうの特別支援コーディネーターとはよく接する機会があります。

よく接する機会を持つ理由にもなっていると思うのですが、特別支援コーディネーターは、とても重要な立場なので、問題をたくさん抱え込んでしまっていて、どうしていいかわからないということが挙げられます。

自分たちが期待されていることもわかるし、やっていかなければいけないこともたくさんあるのだけれども、自分の知識や技量、もちろん物理的な時間の問題でもいろいろ限界があるのだという相談を受けることがとても多いのです。

市立幼稚園には、そうなってほしくないと思いますし、もしかしたら、そうならない手だてを今言われた研修以外にも行っているかもしれません。

スーパーバイザーのような人がいると、そういう問題の抱え込みを防ぐだけではなくて、資質の向上という部分についても機能として良いのではないかと思います。

また、資質が向上するというのは、モチベーションの向上にもつながっていくので、そういう取組がまだあれば、もちろん継続していただいて、ないのであれば検討していただくのも良いのではないかと思います。

ほぼ同じお話になってしまいましたが、障がい児に関わる支援計画の立て方も専門的で、技能や知識が必要となり、研修などの深い部分、専門的な研修などが必要になってくると思います。

研修の内容の回数、時間だけではなく、研修の密度の部分も注目した研修の組み方をしていただけると、このような立場を担っている方はとても助かるのではないかと考えて話を聞いていました。

○阿部議長 ありがとうございます。

ほかに、視点3の特別支援に関わりまして、御意見のある方はいらっしゃいますか。

○北本委員 今、お話をお伺いしており、特別支援、インクルーシブの部分は小学校と非常に密接に関わる部分がありますし、そういったニーズに対して市立幼稚園がそれに応えるべく非常に頑張ってきたのを目の当たりにした経験もありますので、それも含めまして、視点3について2点ほどお話ししたいと思っています。

一つは、個々の幼児の教育的ニーズに応じた指導内容や指導方法の充実という点です。

私が市立幼稚園に在籍していたとき、特別な配慮が必要とする幼児への指導は、園長として、園内の支援体制を整えるのはもちろんですが、他の関係機関、医療機関等との連携を図るということも行ってきました。

それも含め、特別支援の体制と捉えて自分ではやってきたつもりです。

一方、園の中では、担任はもちろんのこと、先ほど加藤園長のお話にもありましたが、支援を必要とする子の担当教諭の専門的な知見や豊かな知識ということから、幼児に日頃から適切に関わって、子どもを成長させているということを感じていました。

私の園では2週ごとに保育打ち合わせをしており、遊びの計画や、それに伴って周辺環境をどのように構成すればいいのかということと話し合い、特別な支援を必要とする幼児の保育についても同じように検討していました。

まさに特別な支援を必要とするお子さんに対し、オーダーメイドの打ち合わせをしっかりと行っていた姿に、小学校から行った身ではそのような姿勢に学んだところが非常に多かったと思っております。

それらの積み重ねが、方向性のところにもあり、先ほどからお話もありましたが、サポートファイルさっぽろに表されていて、サポートファイルさっぽろも保護者との懇談はもちろんのこと、保護者が療育機関と話をするときにも活用されていたことを記憶しております。

小学校に対しても、そういった点も含めて、市立幼稚園の園長先生や支援員の先生に教えてもらえれば、小学校でもさらにサポートファイルの活用などが広まっていくのではないかと。

その役割を市立幼稚園に担っていただくということを期待申し上げます。

もう一点は、障がいのある幼児とない幼児が共に遊び、学ぶ機会の効果的な設定ということで、いわゆるインクルーシブです。

市立幼稚園の環境は、まさにインクルーシブ教育の理想型という形で日々行われていると感じています。

これからは、小学校でもインクルーシブはもっと大切にされていかなければいけないと思います。

例えば、特別支援学級の子どもが交流学級ということで、可能な限り通常学級の子と学ぶことによって、その子の良さを伸ばすことにつながっていると、小学校に戻って改めて感じているところです。

市立幼稚園に在籍していた時には、インクルーシブの環境の中で特別な支援を必要とする幼児が1年間を通じて育っていく姿を目の当たりにして、幼稚園の教諭の持っている素晴らしさを痛感し、子どもに寄り添う指導の大切さをまさに実践しております。

しかし、学校によっては、思ったように交流学級が進んでいないという話も聞いております。

幼児期にインクルーシブな環境で子どもがどのように成長したかということを経験した小学校にしっかりと引き継いで、小学校側がそれをきちんと受け取って、学びを継続させていく必要がこれからあるのではないかと考えています。

幼児期に特別な配慮が必要だった児童が、適切な引継とそれを生かした教育課程を小学校の間にしてきたことによって、途中、高学年で通常学級に編入できたり、中学校へ入学するときには通常学級に進学したりする例も見てきました。

インクルーシブを大事にするということは、通常の子どもに本当にいい影響を与えていると、前任校でそういうことを感じてきました。

そういった私の経験から、市立幼稚園で行ってきたインクルーシブの環境を小学校での適切な教育に引き継ぐことによって、その子の可能性が広がることを目の当たりにしましたので、ぜひそういうことも各幼児施設へ波及していくことを期待しているところです。

○阿部議長 ありがとうございます。

特別支援教育に関わりまして、中島委員からも意見を聞き、次の議題に移りたいと思います。

○中島委員 特別支援教育に関して、皆さんの意見にもありましたように、ここ数年で支援体制、研修体制がしっかりしてきているという印象を受けています。

私も研究で見ている幼稚園を見てみても、7、8年前と比べて対応の仕方が丁寧になってきていますし、障がいのある子たちが楽しそうにしている場面を目にすることが多くなっています。

私は、子どもたちがどう関わり合っているかという研究をしています。

具体的には、障がいのない子どもや障がいがある子どもに関わらず、みんなで遊んでいる様子を見て、そこに先生がどのように支援しているかということのを可視化する研究をしているのですが、先生がその技術をしっかり発揮して、子どもたちを結んでいる、子どもたちの活躍の場をしっかりと作ってあげているということは、先生方の技能、技術が本当に優れているところかと思っています。

こういった点は、札幌市としての取組が現場に表れている結果なのかと考えております。

特に研修の意義ですが、皆さんも御存じのように、研修することはとても意味があります。

例えば、目の前で知らないことが起こるとパニックになるのですが、勉強する場がある、もしくは研修で知識に触れる場があると、知らないことでも一端冷静になることができ、もしかしてこのような意味があるのかと考えることができるので、新しい知識に触れることは意味があると思います。

それは、考えるという意味で先生方にはとても力になると思いますし、相談もできるのです。

研修に行くと、そこに来ている仲間や先生もいますし、わからないことがあったときの相談相手を得られるような場になるという意味では、とても心強いと考えられます。

自分はこんな経験をした、こんな体験をしたということをその場で共有できるという意味では、先ほど丸谷委員からもありましたが、研修というのは、これまで発展してきたものをどのようにして、さらに充実していくのができるのかを考えていくことが自然なことであり、縮小するのではなく、充実させていく点が重要かと思っています。

また、コーディネーターの話も出ましたが、各区に1人では、ニーズに対して人員数が少ないという意見は皆さん一致していますので、これをどのように拡大していくのかというのは、予算との絡みもありますが、少し考えていく必要があると思います。

これも、1人だと孤立してしまう可能性があります。

コーディネーター自身の情報のやりとりが重要になるので、複数体制もぜひ検討課題に加えてほしいと思っています。

それから、インクルーシブの話もありましたが、我々大人の世界でも、障がいのある方と仕事をする場面や一緒に生活する場面が増えてきていますし、これからさらに増えてくると思います。

各会社で障がい者の採用枠が増えていきますし、我々は、以前に比べて、よりインクルーシブの世界の中で生きていくということを考えると、幼児期の幼稚園から小学校というところで、みんなで育っていく、みんなで考えていく、みんなで生活しながら楽しい社会にしていくということが重要だと思います。

まずは、その入口としての幼稚園は、インクルーシブの一番大事な場面になると考えています。

○阿部議長 ありがとうございます。

それでは、議事の２、視点の４の幼保小連携の推進及び家庭教育支援の充実について、事務局からよろしくお願いいたします。

○事務局（野切幼児教育センター担当課長） それでは、視点４について説明させていただきます。

資料２枚目の右側になります。

背景としては、近年、小学校に入学した１年生が、遊びを中心とする幼児教育から学びを中心とする小学校教育へと変化する環境の中で、学校生活になじめない状態が続く、いわゆる小１プロブレムがこれまでも問題視されておりましたが、現在も問題として取り上げられており、子どもの発達や学びの連続性を保障し、安心して就学することができるように、幼保小の連携がますます重要視されております。

また、都市化や核家族化など、社会状況が変化する中で、育児への不安感を持ったり、孤立感を募らせたりする保護者の増加などの課題が指摘されております。

このような背景を踏まえまして、視点４の具体的な取組を、「４－①施設間、学校段階等間の接続」と、「４－②家庭教育支援の充実」の２点としております。説明は一括で行いますが、内容の性質が異なるので、検討は２点に分けて行っていただきたいと思いますと考えております。

まず、４－①の事業展開の１点目、グレーの網かけの部分、「幼児教育施設間及び小学校との相互理解の促進」についてです。

これまでの取組としては、市立幼稚園が中核となり、各区の幼児教育施設と小学校の教職員が集まる幼保小連絡推進協議会を年３回程度開催し、互いの教育や幼児期から児童期の子どもの育ちなどについて共有してきました。

また、保護者の了解を得た引継が必要な幼児の引継を行っており、表の３ですが、年３回程度行っている協議会への参加率は、いずれの施設類型でも９０％を超えていて、大変多くの皆様に参加していただいている状況です。

また、幼児教育施設と小学校の連携、接続に関する実践事例集を委員会が発行し、札幌市幼稚園教育課程編成の手引を作成するなどしており、幼保小連携のための取組を行う意義や具体的な手だてをこのような冊子を通じて発信しております。

このほかに、市立幼稚園と小学校間の人事交流を行い、二つの異なる校種で経験を積んだ教職員が、その校種についての相互理解に基づいた教育の推進に努めてきました。

次に、課題としては、これまでの取組により、連携が進んでいるということはあるものの、より幼児教育施設間の相互理解を図っていく交流の機会や方法の改善を行っていきたいと考えております。

資料の３枚目に移りまして、各幼児教育施設と小学校での指導内容や指導方法の一層の工夫や、多様な幼児教育施設がありますので、それぞれのニーズに応じた情報の提供や方法などの対応が求められていると考えております。

今後の方向性としては、これまで進めてきた幼保小の連携を、より一層促進するための体制の検討を挙げております。

また、連携の意義について、多くの教職員が理解し、協議会が活性化するよ

う、内容等の充実を図りたいと考えております。

前回の会議でも、水岡委員、北本委員から、こういった協議会のより一層の充実といった意見もいただいておりますので、そのような取組も取り上げております。

次に、事業展開の２点目になりますが、幼児期と児童期の教育課程の接続の充実に向けた支援についてです。

これまでの取組としては、市立幼稚園において、実践研究を通してカリキュラムを編成・実施しているほか、一部の園ではありますが、近隣の小学校が編成・実施しているスタートカリキュラムについて、内容を一緒に連携して考えたり、改善を図ったりということを行ってきております。

また、連携推進協議会では、教育課程の接続や子どもの育ちのつながりについての理解促進を図ってまいりました。

課題ですが、今後も、幼児教育施設と小学校が協働して連携、接続に関するより良いカリキュラムの編成・実施を進めていくにあたり、来年度から全面実施となるスタートカリキュラムの役割も重要になってきますので、今後、より一層推進していくということが課題かと考えております。

今後の方向性としては、市立幼稚園と、先ほど御説明した近隣の小学校が連携して行っている子どもたちの交流や教育課程の接続などの研究が先行的な研究としてありますので、他の幼児教育施設や小学校の参考となるように発信したり、研修の機会を提供したりしていきたいと考えております。

以上が幼保小の連携の部分となります。

次に、「４－②の家庭教育支援」の部分の説明いたします。

資料の右側に移り、これまでの取組ですが、市立幼稚園の園舎や園庭を開放し、幼児期の教育の理解、啓発や子育てについての情報提供、また、保護者からの教育相談などを行うポロップひろばという会を全ての市立幼稚園で行っており、保護者の方の不安を解消できるように子育ての支援に努めてきました。

また、保護者と園が共通の認識で子どもと関わり、その良さを認め、成長を促すことを目的に作成したリーフレット、小さくて見づらいのですが、表４の

「さっぽろっ子『学び』のススメ【幼児版】」というものを、現時点では、市立幼稚園の各家庭に配布しております。

市立幼稚園では、懇談会で取り上げるなど、保護者の方に対して日常的な場面でこのリーフレットを使っていただけるように活用いただいております。

さらに、幼児と保護者が一緒に活動する保育参観・懇談を開催するほか、市立幼稚園の先生が講師となって、ちあふる等の子育て講座で幼児期の教育について講演をしております。

前回、岩本委員から、こういった子どもと一緒に活動するということをやっている、そういうものが研究の内容にもなるのではないかという御意見をいただいております。

また、多様化している子育て家庭に対して、どのようなアプローチが有効なのか、どのように情報提供を行うとよいのかということが課題であり、地域のつながりが薄くなっている中、地域の施設が一体となって子育て家庭を支えていく環境づくりの推進を挙げております。

前回の会議においても、川又委員から、保護者が楽しく子育てすることの重要

性や、齋藤委員からも、母親の社会性という意見をいただいておりますので、どのような支援が重要なのか考えていきたいです。

今後の方向性ですが、地域資源を活用するなど、地域が連携して子育て家庭を支えるための実践研究をより進めていき、活用しやすくなるような研究を発信するうえでの工夫をしていきたいと考えています。

そして、ポロップひろばで子育て講座を行っておりますので、私立幼稚園等と連携し、このような取組をさらに普及・啓発していくようなことや、学びのススメ幼児版の普及、活用の拡大も進めていきたいと考えております。

○阿部議長 ありがとうございます。

それでは、視点4につきましては、1と2と分けて検討したいと思っております。

まず、1の幼保小連携について、先に話し合いたいと思います。

二つの事業の方向性が示されております。

一つ目は、幼児教育施設間及び小学校との相互理解の促進と、幼児期と児童期の教育課程の接続の充実に向けた支援ということで分けられておりますので、その点から進めていきたいと思っております。

まず、水岡委員から、幼保小の連携を行っている中で、その効果など感じていること、課題などがありましたら、御意見をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

○水岡委員 幼保小連携は、学校によって、とても温度差があると感じております。保育園側の人の体制は変わらないのですが、学校の管理職は、2年から3年ですぐ変わってしまうので、管理職が変わると幼保小の取組が以前と異なるということ、園長会や、各先生方が感じており、もったいないと思います。

せっかく幼保小連携の取組をしているのに、他の保育園の先生と、進学する学校や人によって取組に対する熱意の温度差があったと話すことがあります。できれば小学校の方で温度差が少しでもなくなり、皆さんが熱意をもって幼保小連携に取り組むことができるような研修をしていただけたら嬉しいです。

また、私は小学校との連携が始まってから、学校評議委員をしたことがありますが、学校が身近になったことは事実です。

保育園には、小学校との連携が取れなかったと感じる時期があり、小学校とつながりづらいと感じていたので、幼保小連携が始まってから、顔が見える体制になり、連携が取りやすくなったことは事実なのですが、その状態が足踏み状態で以前から良くなっていないということを感じております。

連携に関しては、年に3回の会議を開催していますが、実質的には1回の幼児の情報の引継のみで効果的に機能としているとは言い難いので、これから、さらに幼保小連携の取組を充実していくためには、もう少し改善してもいいと思います。

また、研修も行われますが、短い時間で、その中身がなかなか深まらないので、もっと小さなブロックの中での研修をできたらいいのではと思います。

○阿部議長 ありがとうございました。

続いて、私立幼稚園の立場から、丸谷委員、いかがでしょうか。

○丸谷委員 私立幼稚園の立場からは、幼保小連携に関し、幼保小の連携推進協議会と幼保小の連絡会の2点の柱があり、10年ほどの取組の中で充実してきまし

たが、幼児教育センターと市立幼稚園という窓口があったからこそ、このような機会が設定されたということ、結果として実感しております。

私も、政令市の会議等で全国の会議に行ったときに、他都市でもこのような幼児教育センターや、小学校との関係窓口になる市立幼稚園さんがない政令市は、幼保小連携の取組がなかなか進まないという現状を聞いており、札幌市の取組として評価されるべきことなのではないかと感じています。

一方で、幼保小連携の形はできているのですが、まだまだ不十分と考えていて、形はあるけれども、中身については、まだまだやれることがたくさんあると考えています。

また、幼保小連携に関しては、市立幼稚園が率先して窓口になってやっていただかないと、私立幼稚園、保育園だけでは限界があります。

なぜかという、地域との連携を考えたときに、特に私立幼稚園は、札幌市の場合は園バス等で広範囲から園児が来ているため、一つの小学校と校区であってもつながりにくい現状があります。

保育園も同様に、札幌市内のあらゆる地域から送迎されて利用されている方が多いので、公立の市立幼稚園という地域に根差した在り方ができる園として、小学校との連携のモデルとなり、そして、モデルがモデルで終わらないために、きちんとほかの幼稚園と保育園が実際に小学校とつながることができるような取組をもっと期待したいと思っています。

私の幼稚園の事例で恐縮ですが、実際に幼保小連携推進協議会で小学校の先生とのお勧め訪問日を設け、実際に小学校の授業を見に行ったり、幼稚園での保育を見てもらったりという日を設けました。

そのような企画を設けて、幼保小連携推進協議会を行おうとしましたが、実際に幼稚園に来る小学校の先生は誰もいないのです。

私は、一人で小学校に行きましたけれども、私の幼稚園も、私以外は出席できていない状況で、お互い様ですが、これが実情なのです。

そのような形で終わらないようにするためには、市立幼稚園がもっと幼保小連携を推進する上での窓口となっていただく必要があると考えております。

もう一点の接続の充実に向けた支援としては、教育課程の編成が挙げられます。

これも同様に、幼稚園教育における要領等が改訂され、小学校の新学習指導要領の本格実施が来年4月と迫り、教育課程の編成や、話し合いの場だけではなくて、例えば、教育課程の接続がどのように行われたのかという検証を行うとか、幼保小の接続が子どもの姿にどう影響して変化していったのかという点まで検証をしていく必要があるのではないかと考えています。

幼児期の終わりまで育ってほしい10の姿を切り口にしながら、全ての教科、あるいは生活科を中心としても構いませんが、教育課程の接続の検証に関しても私立の立場では限界があるので、市立幼稚園がモデルとなり、先進的に取り組み、小学校で幼児期の遊びが教科の学習につながるという検証を行っていただきたいと思っています。

現在も取り組んでいただいていると思いますが、まだまだやれることがあると思いますので、さらなる充実を期待したいと考えております。

○阿部議長 今、丸谷委員から、さらなるものという話が出ましたが、加藤委員

に、今、市立幼稚園で進めていること、実際に事業を行って充実していることなどについて、課題等も含めて御意見をいただければと思います。

○加藤委員 話に上がっておりました幼保小の連携推進協議会ですが、各区で開催されるようになってから、8年ほど経過しています。

8年前を振り返ると、それぞれ違う団体が集まって年に3回の協議会の開催に向けて、市立幼稚園の園長が、各団体の連携担当の校長先生や園長先生と様々な調整をし、進めてきた経緯があります。

各区の園長が、色々な団体を超えて、力を合わせていくことができるよう、協議会の運営に取り組んできましたが、8年経過し振り返ってみると、区によって特徴があります。

例えば、園数、校数が区によって差があります。

ただ、全ての区の幼保小で連携の意識が確実に高まっていると実感しています。

また、先ほど水岡委員からお話があったように、どこの区でも連携推進協議会をきっかけに顔見知りになり、お互い、連携について話しやすくなっているという声をたくさん聞いております。

また、担当者が変わることは、私たちも課題だと思っており、小学校の先生にも幼保、認定こども園と連携する必要性を感じていただけるよう、これから進めていかなければいけないと思っております。

また、相互理解という課題については、協議会の中でも、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や資質、能力について一緒に研修する機会を設けたりしています。

また、ただ単に幼児と児童と一緒に活動するなどの交流だけではなくて、その交流でお互いに何が育っているのかとか、幼稚園、保育園、認定こども園等で幼児期に培った力がどのように小学校につながっていくのかということを話し合うようになっています。

小学校がスタートカリキュラムを作成するに当たって連携するなど、接続を意識した連携を今少しずつ進めるようになっています。

市立幼稚園としては、幼稚園、保育所、認定こども園、小学校がともに学び合う場になることを目的として、地域公開保育なども毎年行っており、保育を見てくださった方々が何か一つでも持ち帰っていただけるようにと考えて各区で取り組んでいます。

小学校と連携していくということを保護者に発信していくこともとても大事だと思っており、保護者にとっても、園が小学校と連携しているということが入学に当たっての安心感につながるようにしていきたいと市立幼稚園としては考えております。

連携については、小学校と近いところにいる同じ公立の立場の園として小学校と率先してつながっていくということで、連携の仕方や成果を発信していきたいと考え、今、実践しています。

○阿部議長 続きまして、先ほど特別支援にも関わってお話がありましたが、北本委員から、実際に小学校の中ではどのようなことが行われているのか、現場も含めて行われていることなどを小学校の立場からもお話しいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○北本委員 先ほど水岡委員からありましたが、校長が変わると、取組が変わるという非常に耳の痛いお話だと思い、聞いておりました。

それから、丸谷委員からも、なかなか連携がとりづらいといったお話がありました。

実際に、区幼保小連携推進協議会で見学会を開催しても、なかなか盛り上がりが見られないというのも耳の痛い話であったと思って聞いておりました。

私は、園長時代とその後の小学校へ戻ってからの6年間、幼保小連携推進協議会の代表者として活動させていただきました。

その経験から話をさせていただきますと、先ほど加藤先生からお話がありましたが、幼保小連携を8年間続けている中で、幼児教育の大切さと子どもの学びの接続の重要性について、私としては、それを理解していただくような活動に力を注いできたと思っていますが、私は小学校と幼稚園のどちらにも在籍していたので、その点がプラスに働いていたのではないかと考えています。

そういった意味では、人事交流についても、もっと盛んに行われるとよいのではないかと考えているところです。

小学校では、子どもが学びやすいようにいろいろな指導をして、揃えて小学校の学びをスタートさせるということに力を注いできたところがあるのですが、正直に言って、それに適応できない、なじまない子がやはりいるのです。

そのような点にスポットが当たってきて、少しずつ、連携推進協議会などを通して、小学校が幼児教育とは何かということを学んだり、幼稚園の先生が小学校に行ったらこのようになるということを学んだりしながら、お互い顔の見える連携をしてやってきたことによって、お互いの学びをよく知り、接続していきましょうという話になってきたのではないかと考えております。

先程、丸谷委員から、一人も来なかったという話がありましたが、実際に私がいた手稲区では、1日だけではなくて、何日間か設け、この間に好きな時間でいいですから来てくださいというお話をしたら、述べ数十名の幼稚園の先生、保育園の先生に見学に来ていただいたということも経験しております。

逆に、学校のほうも、なるべく都合をつけて、若手の教諭を中心に幼稚園の見学に行くということもさせていただいておりました。

そういった意味では、これからもスタートカリキュラムの編成や、小学校の場合はスタートカリキュラムだけではなく1年生のクラス編成もありますので、この連携は間違いなく円滑な接続の一助になると思います。

そういったことをこれからも大事にしながら、幼児期に育む資質、能力を三つの柱で整理したこと、その内容や育ってほしい姿については、これからも幼保小の交流を通してお互いが研修し、より深い理解のもと、就学してくる幼児の実態に即したスタートを各小学校が切れるようにしていかなければいけないと考えております。

そのことは、小学校長会でも取り組んでいかなければいけないと思っています。

市立幼稚園には、布で例えると、各幼児教育施設をつなぐ、横糸の役割と、小学校へ接続していくという縦糸の活動があると思っています。

その横糸と縦糸がしっかりと結びつくことによって、丈夫な布ができるということになり、そういう意味では、市立幼稚園は、大変重要な役目を担っていると

思います。

それを、小学校を含めていろいろな施設がしっかりと把握して、支援体制、バックアップ体制をとることも大事ではないかと思っていました。

○阿部議長 ありがとうございます。

①につきまして、ほかの委員方々からも御意見があればと思いますが、この連携等につきましていかがでしょうか。

○齋藤委員 幼保小連携について、私も当時はとても神経質になっており、子どもが年長のときには小学校に3回も見学に行って、校長先生、教頭先生、総務の先生とお話しました。

親にしたら、校長先生、教頭先生は、いつ変わるか分からないという気持ちがあったので、長くいそうな先生、昨年あたりに赴任したという話を聞いた先生、特別支援の先生、色々な先生とお話しました。

それは、一個人と私の特性もあったと思うのですが、どんなお子さんでも、お母さんは、小学校に上がったらどうなるのか、どんなクラスメートがいるのか、どんな担任の先生がいるのかといったように、たくさんの不安を抱えながら入学されると思います。

私は、小学校に子どもが通っていて、先生たちのお忙しさを目の当たりして、本当に大変だなと思っています。

でも、幼稚園の先生、保育園の先生が集団で子どもたちを見守れるプロの目がここで連携して協議の場を持つというのは、本当に大切に、ありがたいと思っています。

この会議のメンバーの中に、校長先生だけではなくて、学校に長くいらっしゃる先生が参加できると、また次の学校に移っても、その先生が教頭先生や校長先生になっても、続いていくのではと感じています。

ことばの教室の活動でも、各区に一つずつしかなく、通級への理解と言っても、設置校の校長先生、教頭先生になったことがない方にはなかなか理解していただけないので、ぜひ、教頭先生、校長先生だけではなく、ほかの先生も協議会の場に出られるような機会があればいいと思います。

その場で、こんなよい事例があったのだということが話されると、特別なニーズがある子だけではない子にもいい効果があるのではないかと思います。よろしくお願いします。

○阿部議長 ありがとうございます。そのほか、委員からございませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○阿部議長 続いて、視点2の家庭教育支援(子育ての支援)の充実に移っていきたくてと思っています。

初めに水岡委員から、保育所で子どもと接していて、また、保護者と接している中で必要な支援、感じていらっしゃる事など、家庭教育を進める上で課題とされていること、また、市立幼稚園に対する期待することなどをいただければと思います。

○水岡委員 幼稚園でバス通園しているのと違い、保育所では、保護者が毎日保育園に送迎しているので、保育所が家庭とのつながりが深いのではないかと、そして、家庭の状況がよく見える場所なのではないかと思っています。

先ほどもお話ししたように、発達に課題を抱えるお子さんがいながらも、それ

を認めたくない保護者の心情や、今後どうしていけばいいのだろうかという不安、家庭の問題などを支援していく中で、市立幼稚園の中にいるコーディネーターに相談するなど相談の対象が広がることで、保護者の不安を解消しながら、一歩先に踏み出すことができるようになります。

そのようなお話を、これからもっと深めていけるような支援体制でいただけるとありがたいと思っています。

保育園は仕事をしているお母さんがほとんどで、保護者の方は一人一人違いますけれども、子どものためとは言え、時間をとって、どこかに行くことに二の足を踏むお母さんもたくさんいらっしゃいます。

その中でどのように支援を進めていったらいいか、ともに考えていただけるような公立幼稚園と連携を取れることはとてもありがたいと思っていますし、今後そのような機能を充実していただきたいと思っています。

○阿部議長 ありがとうございます。

それでは、続いて、PTAの委員さんのお二人からも家庭教育に関して色々御意見をいただきたいと思っています。

家庭教育を行っている中で、これまでの経験から、困ったこと、また、家庭教育を行う上でこのような支援があればいいといったようなことなど、ほかの保護者の方と接して感じていることをお話しいただければと思っています。

まずは、岩本委員から、続いて、川又委員からお話をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○岩本委員 市立幼稚園の特徴かと思いますが、市立幼稚園には送迎バスがないので、日々、送迎をしています。

送迎のときに、困ったことや不安に思ったこと、ちょっとした伝えておきたいことなどをすぐに幼稚園の先生へお知らせして、情報共有して、話し合える環境にあるのがとても良いことだと思います。

それから、保護者が園児の遊びや活動に参加するあそぼうデイがあるほか、息子が通うはまなす幼稚園の年長クラスでは、1学期にオタマジャクシの研究が自発的に行われ、毎月の誕生会で分かったことを発表する場があります。

子どもたちは、発表するので、練習しますが、そのリハーサルのお母さん方も来てくださいますと声をかけて様子を見せてもらったり、日々の遊びの様子や学級活動の取組を、写真を活用して園の玄関に掲示してくれたりしていますので、日々の様子が先生の言葉からも、耳からも目からも分かるということは、保護者にとって、とても安心感があります。

また、年数回、担任の先生との懇談時には、特に、年長に対して、小学校に行ったら、このような力が求められるので、このようなところを伸ばしていくために、家庭での子どもとの関わり方など、具体的なアドバイスをしてもらっています。

先ほど、ポロップひろばの説明がありましたが、私は、幼稚園に入園してから、時間があるときは息子を連れて参加しています。

そこで子育ての情報を得て、子どもを遊ばせながら、気軽に教育相談ができるという点で大切な場になっているということを私も見て感じており、ポロップひろばは、これからも充実したものになるように継続していただければと思っています。

最後に、資料に、『さっぽろっ子「学び」のススメ』というものがありますが、はまなす幼稚園では、リーフレットの配布以外にも、PTAの活動として出前講座を実施して、保護者を集めて詳しい話を聞いたりする活動もしております。その中で、お母さん方から、子どもと会話する時間を意識的に持てるようになったとか、子どもに対して、こういうときはどのように声をかけたら会話を引き出せるかが参考になったという声もあります。

市立幼稚園だけに配られているということは初めて知ったので、私立幼稚園にも見ていただいて、ぜひ各家庭における活用をはかっていただければと思います。

○川又委員 育児で悩んでいる保護者の多くが希望していることは、子育ての情報が欲しかったり、話を聞いて欲しかったりという種類のものが多いと思います。

市立幼稚園は、幼稚園内での交流も、もちろん充実していますが、各区のPTA連合会に加入しているので、区P連の行事に参加することで、たくさんの保護者と関わることができるし、小学校の情報や、場合によっては中学校の情報まで聞くことができると思います。

私の子どもが3人とも私立幼稚園でしたが、その幼稚園は、札幌私幼PTA連合会に参加している幼稚園だったので、ほかの区のたくさんの幼稚園の方と関わることができて、同じ境遇の方はもちろんですが、上の子がいる保護者から小学校の話やいろいろな話が聞き、たくさんの人と関わることができて、とても楽しく子育てをすることができました。

子育ては、幾ら勉強しても身につくものではないし、正解もないし、終わりもないと思うので、いろいろな教育施設や地域の方と一体となって、保護者も子どもたちと一緒に育っていければと思っています。

PTAは全ての子どもたちのために思って活動していますので、各区のPTA連合会や地域の小・中学校のPTAの方の力を借りて、これからもたくさん関わっていただきたいと思っています。

○阿部議長 続きまして、地域ボランティアとしても幼児教育に携わっていただいている小清水委員から意見ををお願いします。

これまでも、市立幼稚園と地域が協働して行ってきた取組などがありますが、保護者が安心して子育てできるような地域の環境、また、市立幼稚園だけではなく、全ての幼児教育施設の地域との連携の取組を充実させる観点からお話いただければと思っています。

○小清水委員 ポロップひろばは、私も関わっていますが、春になってすぐに行うのは、ハツカダイコンを植えて、みんなで育てて、できたときに酢の物などで召し上がってもらおうことです。

植物を植え、育ったときには、必ず食べてもらいます。

おいしい、おいしくないはわかりませんが、子どもはとても喜び、残さないの、非常に良いと思っています。

そのときに、お母さん方にもなるべく声をかけて、こうやって植えるんですよ、こうなんですという話を併せてしています。

かっこう幼稚園では、12月にきな粉餅を突いて食べますが、その前の日には石臼を回してもらいます。

そのときに、お母さん方も、きな粉が大豆からできることを知らない人がたくさんいて、そういった意味では、お母さんたちの食育もやっている感じがします。

かっこう幼稚園の園長は、虫が好きで、「小清水さん、サンショウの木はありますか。」と言われて探してみると、たまたま植えてあり、園長は、すぐに来て、木を見て、アゲハチョウの幼虫がいたので、もらっていきまうと言ひ、餌は、サンショウの木を摘んで持っていき飛ぶまで育てているなど、私の庭を幼稚園の庭と同じように活用してもらっています。

このような活動がボランティアになるかは分かりませんが、みんなが私をチョウの次ぐらいに大事にしてくれている感じを受けています。

そういうことを通じて、なるべく園と関わって、保護者にもぜひ一緒に色々な話をしていきたいと思っています。

また、小学校との連携ですが、かっこう幼稚園は、二、三回、小学校を訪問しましたが、色々なことをやっていると思います。

衝撃だったのは、学習発表会の前の日に年長組が見に行って、あの劇はとてもよかった、今度の自分たちの学習発表会に取り入れてやろうではないかという相談ができていているというのです。

そういう意味では、訪問というのは、次の世代にバトンタッチするという意味では大事な行事ではないかと思っていますので、これが続いてくれればと思っています。

そういうことを通じて、地域全体で交流を活発にしていきたいと思っています。

地域の方々が連携することは非常に大切だということを改めてお話しして終わりたいと思います。

○阿部議長 ほかに、子育て支援について御意見等がありますか。

○齋藤委員 市教委から配られている「まほうのかいわ」のパフレットを子どもが小学校で初めてもらったときに、素晴らしいと思い、とても感動しました。

これは、市立幼稚園にも配られているのですね。

これとは別に、札幌市で発行している発達障がいのある方たちへの支援ポイントをまとめた冊子の「虎の巻シリーズ」が、全国的にとっても有名ですが、小学校だけではなく、幼稚園にも配っていただきたいと思っています。

また、先ほどの話題の続きにもなるかもしれませんが、家庭教育支援の充実について、私立幼稚園、市立幼稚園があるというのはとても大切なことだと思っています。

まほうのかいわの中でも、子どもの気持ちや思いを受けとめる、子どもの意欲を育むためにという項目がありますが、幼稚園から小学校への連携のかなめになるのは保護者でしかないと思います。

保護者のストレスマネジメントも役割として意識されると、市立幼稚園の役割がより強化できると思っています。

先ほど水岡先生が言っていた障がいに対する理解につながらない保護者についてですが、子どもが小さな段階で障がいを受容させるというのは、親にとっては至難のわざです。

私は、障がい自体を受容しなくてもいいと思います。

うちの子はこれを見たときに不安になるとか、あの音を聞いたときにパニックになる、動きがとまってしまうとか、そういう情報を親が獲得しているか、そして、それを小学校の先生に伝えられるかどうかが重要だと思っています。

また、欲を言えば、子ども自身が先生にあれを見ると怖くなると言えたりするのが一番望ましいと思っています。

家庭生活の中では親がなかなか気付けないこともあるので、幼稚園の先生が相談の場等で、こんないいところがあるとか、こういうアクションを起こしたときに不安かもしれないということを親に気づかせてあげられる場でもあってほしいと思います。

私は、子どもがパニックを起こすというのは、泣いたり騒いだり走っていなくなったりということだと思っていましたが、私の子の場合のパニックは、その場に立ちすくんで、にやにやしているような状態で、専門家にパニックを起こしていると言われるまで分からなく、ずっと恥ずかしがっているだけだと思っていました。

たくさんのお子さんを見ているからこそ気づける視点で、親や子どもに対して、障がいを受容してもらうというのではなくて、このような状況の特にこのような行動をとると説明できるような力を相談の場などで授かることができればいいと思っています。

○阿部議長 そのほかにいらっしゃいませんか。

○丸谷委員 子育て支援の充実に関しては、私立幼稚園も含めて、こちらに書いてあるような内容のものは、今、どの園でも真摯に向き合って取り組んでいると思います。とりわけ市立幼稚園に対する期待という点に関してお話しすると、幼児教育の理解の啓発と書いてありまして、これまでも取り組んでいただいておりますが、さらに充実していただきたいと思います。

各園単位では、子ども・子育ての支援はいろいろなやり方を模索しながらできていますが、幼児教育の理解や啓発に関しては、私立幼稚園の一園単位では難しく、市立幼稚園10園の力と幼児教育センターという札幌市のセンター機能を使って、札幌市全体にどれだけ幼児教育が大事なのかを発信していくべきだと思います。

それは、遊び保育を中心に今まで実践を積み重ねている市立幼稚園だからこそ啓発ができ、今までの研究の積み重ねが揃っているからできるのだと思います。

この点に関しては、もっともっと発信して理解を深めていただければと思います。

そうすることで小学校教育につながっていくことが市民、社会に理解してもらえるような取組を期待したいと考えております。

札幌市は、子どもたちが健やかに育つまちを掲げておりますが、それは、待機児童対策として、単に箱物をつくっていくという考え方ではなく、子どもたちにとって良質な環境や、どのような過ごし方が必要なのかという質の部分に関して、市立幼稚園、幼児教育センターが中心となって理解と啓発に努める必要があると考えております。

これは、全ての私立幼稚園の願いだと思いますので、お願い申し上げたいと思います。

○阿部議長 そのほかにございませんか。

○相内委員 先ほどの齋藤委員のお話を聞いて、私が最近色々ところで伝えていたことの裏づけをいただいた気がして、とても自信ができました。

障がい受容については、急ぐ必要がないし、小さい頃に見えている部分は幾らでも変化していくものだと思いますが、特性受容はしたほうが良いと伝えることが多かったです。

その部分について、重なることを言っていたので、間違っていなかったと改めて自信を持ちました。

ただ、小さいお子さんと関わる方に障がいがあるかもしれないと伝えるときに、伝える側、幼稚園の先生や保育所の先生だけではなくて、福祉に携わっている人も精神医療に携わっている人も共通のことですが、知的障がいや発達障がいや精神に関わる特性を研修などで勉強するとします。

研修の特性上、仕方ないことだと思いますが、まずは表面的なところから勉強していくと、専門家も障がいや特性に対してステレオタイプに染まっている人がとても多い印象を受けています。

その結果、柔軟性のない情報を伝えてしまい、反発を招くことが現場では物すごく多く起きているので、難しいところだと思います。

先ほど密度という表現を使わせていただきました。

知識に対する深さを全ての関係職種が学ぶのは難しいことは良く分かっていますが、知ったほうが、伝える側も気持ちが楽になり、幅広く伝えることができると思います。

その結果、もしかしたら、今で言う障がい受容と知った人から聞く障がい受容はまた違ったプロセスになるかもしれないので、例えば希望する人だけでも先行して受けられるなど、専門職が細かいところまで勉強できる機会があると、また変わってくるのではないかと思います。

○阿部議長 そのほかにございませんか。

○水岡委員 先程の発言に、説明が不足していた点があったと思います。

障がい受容については、認定されるといった意味で発したわけではなく、話を聞くことによって、子どもへの関わり方が違ってくるところを大事にしたいと思っています。

今まで、私個人としてそういう伝え方をしてきたつもりですし、保護者の一方的な見方ではなくて、複数の視点から子どもを見てもらって、今、相内委員がおっしゃったように、子ども一人一人のこういうところが得意だ、こういうところが苦手なんだと個人として捉え、保護者と園の職員が共通して見ることがとても大事だと思っています。

○阿部議長 ほかにございませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○阿部議長 それでは、中島委員からお願いします。

○中島委員 先ほど丸谷委員からお話がありましたが、市立幼稚園の役割として一番力を発揮できるところは、発信できる力だと思います。

色々な関係機関と連携して、研究の成果もしくは実践の事例として蓄積して、それを世の中に啓発し、発信していく役割は、市立ではないとできない部分があると感じています。

子育て支援はもちろん、幼保小連携もこのような点で発信していくというの

が、この先10年の市立幼稚園のあり方の大きな柱になっていくと思います。

それを踏まえた上で、幼保小の連携は、ここ数年、園、小学校のご尽力でかなり進んできたと思います。

特に、過去の事例がほぼなく、どうやっていいか分からない中で、難しいところもありながら、先生方の力でこれまでやられてきたと思っています。

そういう面では、成果が表れてきましたし、先生方の意識も確かに変わってきたところがあるので、幼保小連携の取組は、とても重要だと思っています。

特に、幼児教育センター、教育委員会、市立幼稚園が連携して取り組めるというのが札幌の大きな強みの一つなので、今後も引き続き行ってほしいと思っています。

いかに市立幼稚園がモデルとなるか、そしてハブとなるかというところが重要だと思います。

特に、市立幼稚園であれば、地域の中心的な役割を担っているのもそうですが、大学や研究機関との連携という面でも結びつきやすいところがあるので、先ほどありました検証というところでも市立幼稚園だと可能になっていくと感じています。

ただ、注意しなければならないところがまだあります。

例えば、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿というのは、あくまでも育ってほしい姿であって、育っていなければならない姿ではないです。

そういうところが先生方のプレッシャーになって、ここまでしなければだめだと感じるのではなくて、子どもの自然な発育、発達をうまくサポートできるよう気持の余裕も必要であったりすると思っています。

もちろん、小学校に向けて準備をすることも子どもたちを育てるきっかけの一つですが、前倒しでこれをしなければならない、この能力を身につけさせておかなければならないということではなくて、幼児期に必要なこと、小学校の学童期に必要なことをちゃんと見つけることが必要だと思っています。

連携について、話はそれますが、この検討会は、かなり物々しい雰囲気を感じていました。

ただ、事務局が事前に私のところに来て、いろいろと話を聞いてくれて、ざっくばらんな話をしながら、会議の運営をよろしくお願いしますということで別れましたが、このように事前に顔を合わせる機会があると随分来やすい雰囲気になります。

知っている人がいる、話を聞いてくれる人がいるということがきちんと事前に分かっていると、この検討会も来やすくなります。

40半ばの私でさえこんなに心が重くても、話を聞いてくれる人がいるだけでこれだけ気が楽になるのです。

これが6年しか生きていない子どもたちだったらどうかということです。

そういったところで、子どもたちの目線で、子どもたちにとってどんな連携が必要なのかというところをこの先は考えていく必要があると思います。

もしかすると、昔は、先生の視点での連携だったのかもしれませんが。

それがこの8年ぐらいで変わってきたと思います。

いかに子どもたちをつなごうとしていくのか、子どもたちが自然に段差なく育っていけるかというところに視点が移ってきたので、それをどう具体化してい

くのかがこの先の課題になっていくと考えています。

それから、子育て支援の話です。

これも重なる部分が多いと思いますが、私もポロップひろばで講師をさせていただいたことがあります。

私は、2歳ぐらいの子たちを対象にした親と遊べる運動遊びみたいな講座を行いました。面白くないし、興味ないだろうなと思っていたら、結構人が来てくれたのです。

私の人気があるのかなと思いましたが、私の講座が面白そうということではなく、幼稚園を、子どもたちが過ごす場所はどういったところなのか、どんな人がいるのかということを見たかったのです。

そういう意味では、保護者の方々も不安がとても大きいということです。

先ほどの話ともつながりますが、話を聞いてくれる人が、そこにいることを確認するというのはとても大きなことだと思います。

私も子どもがいるのでわかりますが、支援というところで最も助けになるのは、親を褒めてくれる人がいるということです。

今、私の子どもが行っている保育所もそうですが、今日はこんなことがありましたという話を帰り際にしてくれます。

こんなことができましたとか、仲直りを仲裁して頭をなでてあげましたなど、まるで自分のことみたいにとてもうれしくなって、家に帰った後も子どもに対して優しくなれます。

家庭の育て方にもとても影響する支援の仕方というのは、先生方の専門性、技術だと思っています。

そういった面で、技術を継承していく、醸造していく、伝えていくというのが幼稚園の役割の一つでもあると思います。

これを途切れさせないためには、先ほど言いましたが、中核になる存在、情報を発信する存在となる市立幼稚園の役割は大きなところになると思っています。

○阿部議長 そのほかに、御発言がある方はいらっしゃいませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○阿部議長 中教審のメインテーマは、社会に開かれた教育課程ということで、基本的にはみんなで子どもを育てるのが中核になっています。

先生だけではなく、家庭、社会も含めてみんなで子どもを育てていこうということです。

その中で、札幌でも、この間の虐待の悲しい事案がありました。

事件を聞き、もちろん親の責任にすることは簡単ですが、あの親を育てたのは私だったのかもしれない、私にももっとできたことがあったのかもしれないと思うと後悔がありました。

ただ、こういった悲しい事案がないと物事がなかなか動き出さないというのが世の中の常ですが、これからあのような悲しい事案を起こさないために、子どもの最善の幸福のために一体何ができるのかといったことを、考えていかなければいけません。

自分事になりますが、孫が今年の4月から保育所に入り、この間、保育所の先生から連絡帳をいただいたのですが、孫がお友達のおもちゃを取ったと書いてあ

りました。

家では、一人っ子で、親が取るわけがないので、初めての事案でしたが、これから指導しますということでした。

そして、先週、つい意地悪で、孫が遊んでいるおもちゃを「かーしーて」と私が言いもしたら、「いーいーよ」と言ってくれました。同じように私が遊んで、言ってみてと言うと、2歳の孫が「かーしーて」と言って、私が「いーいーよ」と言ったら、何とその後「ありがとう」と言ったのです。

これは、子どもたちを集団で育てることの一つの大きな成果だと思いました。

幼稚園も保育所も含め、学校の究極の目的は、ほかの人と一緒にいることは楽しい、ほかの人と一緒にいることはとてもいいことだと感じられることだと言って人がいますが、私もそのとおりだと思っています。

そういった場になるために私たちにどういうことができるのか、それぞれのポジションで考えられることがたくさんあると思っています。

昨日見たテレビの中で、職人の名工が、手抜きと改善は紙一重と言っていました。

これでいいだろう、まあこのへんと言ったら手抜きで、そのまま普通には動くけれども、もう一歩進めて、もっと改善することはないか、もっとすることはないかと考えて職人としてやってきたという話をしていました。

我々も、「協力」という言葉が入ったし、「連携」という言葉も入ったし、きれいな言葉が並んだからいいのではなくて、それが実際の行動目標になって、行動指針になって、一体何ができたのか、80%のときに、100%を目指すのではなくて、120%、130%にするには何があるのかと考えるを変えていかないと、子どもたちの幸せは保障できないのではないかとと思っています。

最後に、事務局から連絡をいただいて、終わりにしたいと思います。

○事務局（野切幼児教育センター担当課長） 皆さん、本日の会議もどうもありがとうございました。毎回、それぞれのお立場から、本当に貴重な御意見をいただいております、大変ありがたく思っております。

今回の第4回目が最後になります。私たちとしては、これまで皆さんからいただいた御意見を整理して、議論の振り返りを中心に進めていきたいと思っております。

また、議論を深めるという意味で、視点を定めて話し合いをしていただきましたが、触れられてこなかったことについて、新たな視点ということで、こういったことはどうなのだというものがあれば、御意見として頂戴したいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

最後の会ですから、できる限り皆さんに御出席いただきたいと考えております。よろしくお願いいたします。

3. 閉 会

○阿部議長 これをもちまして、本日の第3回検討会議を終わらせていただきます。

ありがとうございました。

以 上